

飼料用米新品種「みなちから」の省力・低コスト・多収栽培法

飼料用米新品種「みなちから」は「北陸193号」と比較して出穂、成熟はやや早く、収量性はやや劣るものの、脱粒性、耐虫性は優れる。また、鶏糞を活用した施肥法や疎植栽培、立毛乾燥等省力・低コスト・多収栽培が可能である。

成果の内容

- 1 「みなちから」は「北陸193号」と比較して、出穂、成熟はやや早く、収量性はやや劣るものの脱粒性、耐虫性が優れる。また、種子の休眠が深くないため、採種翌年の播種でも発芽が安定する(図1、図2 一部データ省略)。
- 2 「みなちから」は「北陸193号」同様、鶏糞と被覆尿素の組み合わせで慣行の緩効性肥料と同等の収量を確保できる(図3)。また、疎植でも標準植えと同等の収量を確保できるが、標高の高い中間地等茎数、穂数を確保しにくい地域では収量がやや低くなる(図4)。
- 3 「みなちから」は脱粒し難いため、成熟期後30日の収穫でも収穫ロスや穂発芽の発生は少なく、籾水分を16%程度まで低減することが可能である(表1)。

成果の活用面・利用上の留意事項

- 1 鶏糞の肥効は鶏糞の種類によって異なるため、鶏糞の窒素含有率を考慮して施用量を調整する。
- 2 早い時期に鶏糞を施用した場合は窒素の肥効が期待できないため、鶏糞の施用は水稻移植7~10日前(耕起前)とする。
- 3 日照や地力等ほ場条件により茎数が確保しにくいほ場、雑草の発生が多いほ場では疎植により収量が低下する危険性がある。

具体的なデータ

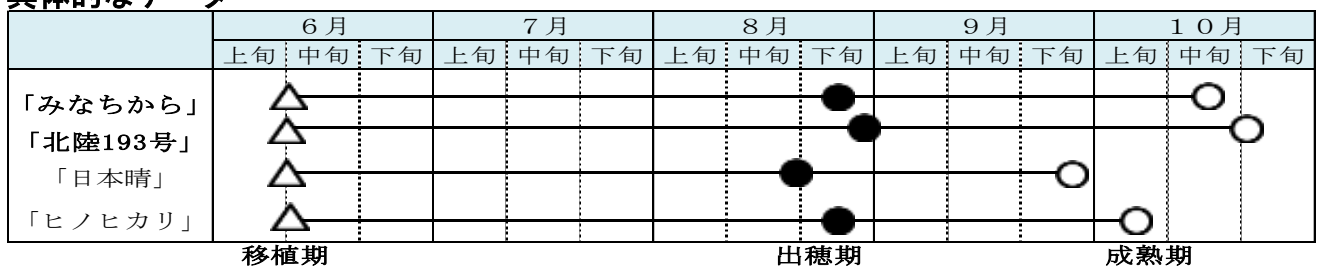


図1 「みなちから」の出穂期、成熟期

注) 農林総合技術センター(山口市大内)で6月10日に移植した場合(H21~23の平均)



図2 「みなちから」の草姿と玄米

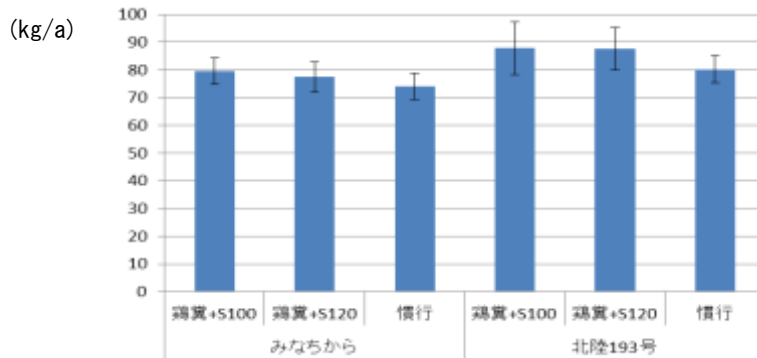


図3 鶏糞と被覆尿素を組み合わせた場合の粗玄米収量

注1)平成27～29年の平均値、移植は5月下旬、窒素施肥量は12kg/10a

注2)鶏糞は500 kg/10a、被覆尿素はシグモイド型100日タイプと120日タイプ

注3)慣行は市販の緩効性肥料(N:P:K=23:10:12)

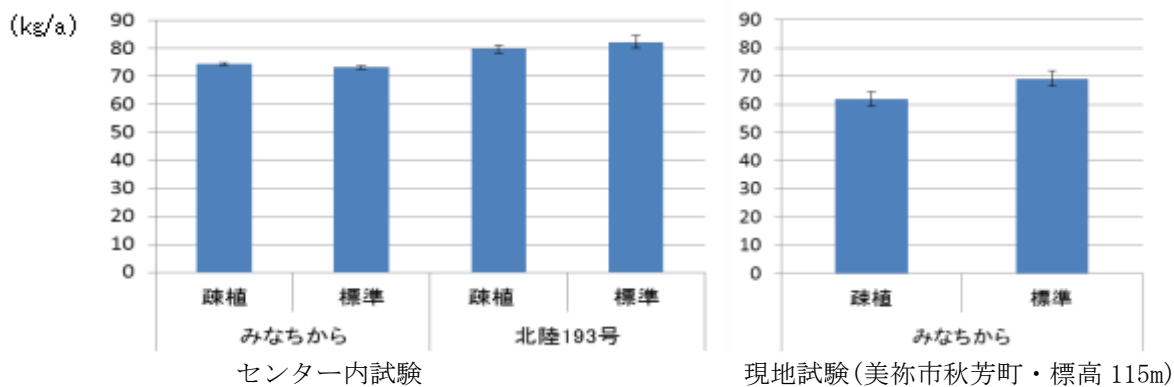


図4 疎植と標準植えの粗玄米収量

注1)平成27～29年(現地試験は平成28、29年)の平均値

注2)疎植は11株/m²、標準植えは18株/m²

注3)移植はセンター内試験が5月下旬、現地試験が6月上旬

注4)窒素施肥量は12 kg/10a(緩効性肥料)

表1 立毛乾燥試験結果

品種・系統	年次	成熟期			成熟期+10日			成熟期+20日			成熟期+30日		
		籾水分 (%)	脱粒	穂発芽 (%)	籾水分 (%)	脱粒	穂発芽 (%)	籾水分 (%)	脱粒	穂発芽 (%)	籾水分 (%)	脱粒	穂発芽 (%)
みなちから	H27	25.4	0	0	22.6	0	0	16.9	1.7	0	15.7	2.9	0
	H28	24.8	0	0	17.0	0.5	0.0	15.5	1.2	0.3	13.8	1.3	0.3
	H29	26.0	0	0	25.1	0.1	0.0	16.5	0.9	0.0	16.1	0.8	0
北陸193号	H27	22.7	4.0	0	21.0	5.3	0	20.1	8.1	0	17.2	9.5	0
	H28	22.9	1.5	0	18.3	2.8	0	16.7	3.7	0	15.7	3.2	0.1
	H29	25.9	2.1	0	23.3	2.5	0	18.4	4.0	0	18.7	5.4	0

注1) 脱粒は2株からランダムに選んだ15本の穂、1本ずつの中央(長さ:約6 cm)を片手で強く握り、脱粒した籾の平均粒数

注2) 穂発芽は1穂当たりの穂発芽粒率

関連文献等

- 平成29年度農林総合技術センター試験研究成果発表会発表要旨「飼料用米新品種「みなちから」の省力・低コスト・多収栽培法」：9-10

研究年度	平成27年～29年
研究課題名	本県に適した飼料用米・飼料用イネ品種の省力・低コスト・多収栽培法の確立
担当	農業技術部土地利用作物研究室 金子和彦・池尻明彦(現 岩国農林水産事務所)・中野邦夫(現 農業担い手支援部就農・技術支援室) 農業技術部資源循環研究室 河野竜雄